

施設利用に関する保護者の意識について

——知的障害者施設保護者の調査結果をもとに——

中山和子

要旨

2012年度「厚生指標」による「平成17年度知的障害児（者）基礎調査結果」では、全国知的障害児（者）数は、「在宅」41万9千人、「施設入所」12万8千人で、総数54万7千人である。そのすべての知的障害の子をもつ保護者の心配や不安は、健常児をもつ親と何ら変わらない。「子どもがいつまでも健康で、幸せに、楽しく生活してくれること」が願いである。知的障害者施設保護者の協力を得て実施したアンケート調査で、保護者の不安の大きさ・複雑さが明らかになったことにより、この当たり前の親の願いを支えることは、障害者福祉に関わるすべての者のつとめでもあると痛感した。

キーワード：知的障害の子をもつ親の不安、年齢と入所・通所の相違、信頼関係の再構築

1. はじめに

この論文を書いたから7年が経過した。障害者福祉の状況は、当時と比べて制度は次々に改変しているが、障害者やその家族を取り巻く環境はより厳しいと言わざるを得ない現状である。未発表のこの原稿を今、発表しようと思ったのは、介護福祉士の養成教育を続けている中で、支援技術や福祉用具は時代と共に進歩するが、利用者も支援する人（学生や仕事をしている人達）も同じ人であることに変わりはない。だから、知的障害者施設に生活している利用者とその保護者の意識をきちんと伝えておく必要を感じたからである。

平成13年から17年まで5年間知的障害者更生施設で、保健師として利用者や職員の健康管理に関わってきた。その間、利用者やその家族から、単に障害の知識だけでなく実に多くのことを学んだ。多くの保護者（特に母親）と話す機会を得て、子を持つ母親としての想いの深さと、教科書には書かれない子育ての苦労などを伺うことができた。しかし、高齢者、障害児・者に関係する法律の制定や改正に伴い、保護者の不安は増すばかりの昨今である。現在、介護福祉士を育成する教育機関に勤めて8年目になるが、この間、「障害や高齢者について」座学では学べない体験学習として、前職場に学生を連れ出して「ふれあい体験授業」を毎年実施させて頂いている。

在任中に「保護者の年齢による心配や不安の相違」に気づいたが、制度が次々変わる中、保護者と職員の関係までも変化する気配が気になっていた。現職で介護研究授業として、学生と一緒に「施設利用に関する保護者の意識について」アンケートをとる機会が得られたので、その結果を報告する。体制がどのように変わろうとも、利用者の利益を最優先に、保護者と職員が信頼関係の中で共に支え合える施設づくりを考えるきっかけになればと期待している。

2. 調査期間：平成18年7月～8月

3. 調査対象：社会福祉法人 知的障害者施設

- ① 更生施設HT施設（入所50人、通所10人）
- ② 授産施設HW施設（通所型30人）
- ③ 更生施設HJ施設（通所型30人）

4. 調査方法：アンケート方式

配布は各保護者会を通じて説明後配布し、個人情報の取り扱いに配慮して、回収は返信用封筒にて郵送回収とする。

5. 回収率：

- ① 入所 42.0%（21/50通）
- ② 通所 64.3%（45/60通）
- ③ 全体 60.0%（66/110通）

入所21人、通所45人から回答を得られ、全体として60%の回収率であった。夏の帰省に合わせて配布していただいたが、入所の場合アンケート用紙を直接手渡せない場合が多いことも、回収率に影響していると思われる。

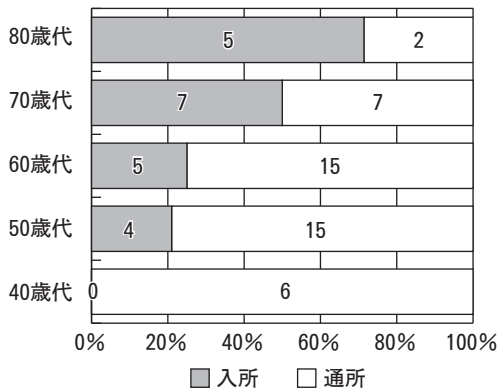
6. 結果および考察：

(1) 保護者の年齢

「保護者の年齢」は、入所では70歳代（33.3%）、80歳代（23.8%）と高齢者が多く、通所では50歳代、60歳代（各33.3%）、40歳代（13.3%）と比較的若い層が多い。当然、「利用者の年齢」も入所より通所の方が平均すると若い。通所では、「20歳代」18人（40.0%）、「30歳代」16人（35.6%）と多く、「10歳代」も1人いる。それに比べ入所では、「50歳代」8人（38.1%）、「30歳代」5人（23.8%）、「40歳代」4人（19.0%）と年齢は高い。70、80歳代もいる。まさしく、知的障害者施設も高齢者施設化しているということである。

保護者も入所者も高齢化現象がみられる施設の現状を、職員も認識する必要がある。

保護者の年齢

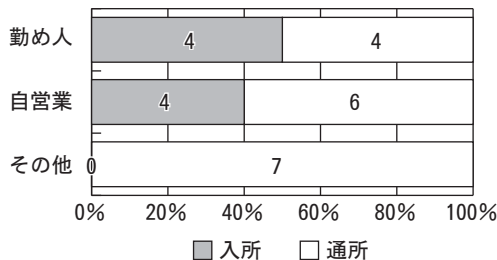


(2) 保護者の職業

「保護者の職業」では、入所13人（61.9%）、通所28人（62.2%）が「無職」である。高齢化に伴い無職の人が多くなり、年金を頼りに生活している方が多いと想像できる。だからこそ自身の事より、子どもの将来に対する不安が高い、ストレスを抱えた日々を過ごしておられると考える。

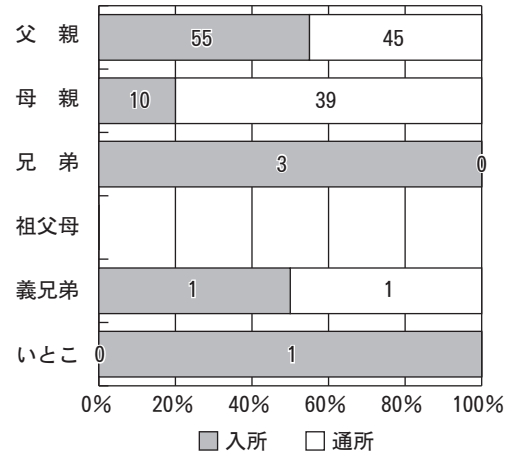
「利用者との関係」からは、親が亡くなれば兄弟、その配偶者の義兄弟と、段々血縁関係は薄れていくことが想像できる。お正月やお盆という昔からの家族行事に、外泊・外出する機会が少なくなり、家族の中での存在位置や役割が変化していくことを意味している。勤めていた時、お墓参りには連れて行けど、家にはあげてもらえず実家の仏壇は拝めなかったという例もあった。

保護者の職業



(3) 利用者との関係

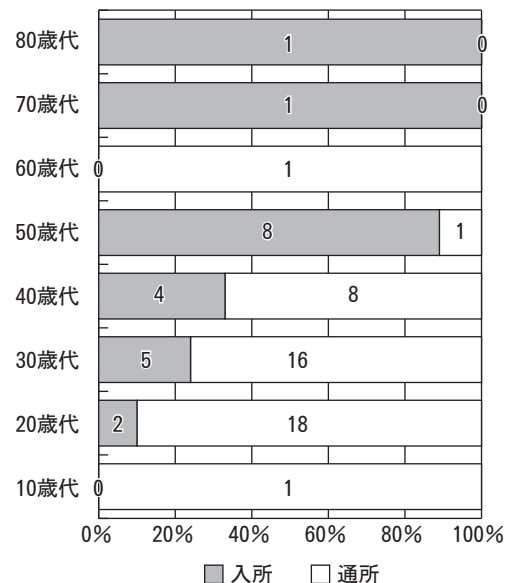
利用者との関係



(4) 利用者の年齢

利用者の年齢が若く、施設利用も「初めて」という人が通所に多い（24人、53.3%）。若年者の入所は、家族だけでの自宅での養護が困難である（障害が重度）ということの意味している。入所においても「初めて」（11人、52.4%）が「複数ヶ所」（5人、23.8%）より多い。一度入所すると余程のことがない限り、そこ（施設）を「生活の場」として定住してきたのである。施設が「いい」「悪い」ではなく、保護者サイドからすると「受け入れてもらえる」施設、として位置付けられてきたと考えられる。しか

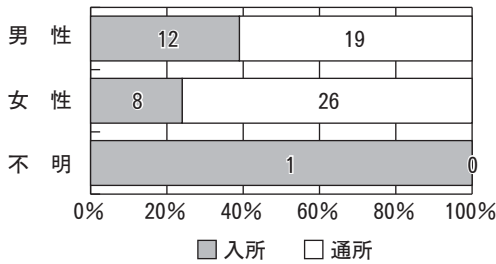
利用者の年齢



し、時代とともに制度が変わりゆく中、今いる施設が「よりいい施設」になることを望んでいるのも家族として当然であろうと思われる。又、現在では、支援も「日中」「夜間」と利用方法の変化もみられる。

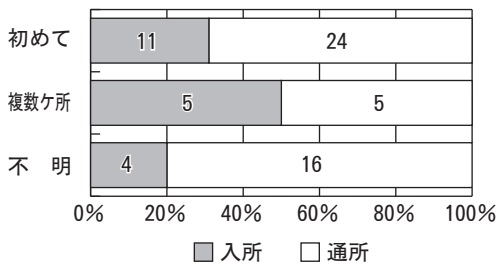
(5) 利用者の性別

利用者の性別



(6) 利用のタイプ

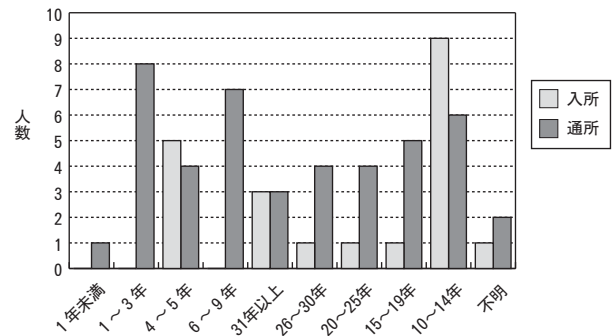
利用のタイプ



(7) 最初の施設から何年目

「施設利用期間」をみると、総体的に長期化しており、入所で「31年以上」が9人（42.9%）、通所でも6人（13.3%）いる。10年以上施設を利用している人は、入所21人中15人（71.4%）、通所45人中22人（48.9%）と高率である。入所が長期化することは、家族構成の変化を想像でき、「利用者との関係」「性別」からも、父親から母親、親から兄弟姉妹、又義理の関係者へと保護者が変わっていく様子や、女性の保護者が多くなっていく様子が伺える。「この子の為に自分が元気でいなくては……」という、障害の子をもつ母親の想いの強さが垣間見えた気さえする。

施設利用年数



(8) 施設入所に対する不安

施設にわが子を入所させるについては、不安があるのは当然である。「入所当時」は通所30人、入所14人（各66.7%）が「不安有」であった。その理由は複数回答で、通所では、「他利用者との関係」「施設になじめるか」「職員との関係」が多い。それに対し、入所では「施設になじめるか」「利用者の精神面」「他利用者との関係」が多かった。年代別にみると、入所では70歳代が「健康面」「自宅からの距離」「職員との関係」、80歳代は「施設になじめるか」「他利用者との関係」に「不安有」が多く、通所では、50歳代で「精神面」「他利用者との関係」、60歳代で「自宅からの距離」「施設になじめるか」に「不安有」が多いという結果である。

入所しての変化については、入所している利用者は19人（90.5%）、通所している利用者は33人（73.3%）が「変わった」と言い、保護者自身も入所15人（71.4%）、通所25人（55.6%）が「変わった」と、施設利用の意義を自覚していると思われる。

入所当時の不安が現在はどうなのかということについて、「現在の不安」は入所19人（90.5%）、通所40人（88.9%）と、「入所当時」より不安は大幅に増している。本来なら施設に慣れてきて、不安は減少するはずなのになぜだろう。入所が長期化することで、本人も家族も年をとり、身体的のみならず精神的にも、環境や社会の急速な変化に順応できない結果ではないかと考える。保護者は「老い」を感じ、不安も多くなったということである。

施設で5年間保健師として保護者の方達と関わり、

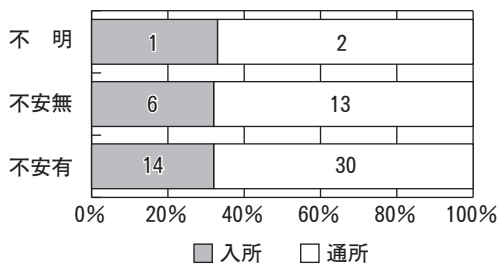
年代による不安の相違を感じていたこともあり、「現在の不安」については、利用者のことと保護者自身のことに分けて聞いてみた。

「利用者」に関する不安の理由は、入所で「健康面」「年齢」に対する不安が多く、通所では「今後の生活」「健康面」が多い。特に、通所における「今後の生活」に対しては、複数回答ではあるが45人中39人が「不安有」と答えている。年代別にみると、入所では70歳代が「経済的なこと」「今後の生活」、80歳代が「心理・精神面」「健康面」をあげ、通所では60歳代が「今後の生活」「健康面」、50歳代が「経済面」「心理・精神面」を不安の理由にあげている。

「保護者自身」に関する不安の理由は、入所では「健康不安」「制度の変化」「老後の生活」であり、通所では「制度の変化」「健康不安」「老後の生活」と続く。いずれも自分や家族の健康不安と介護など、高齢者として当然の不安であり、その他に障害者福祉制度の変革が保護者の不安を増長していることは事実である。

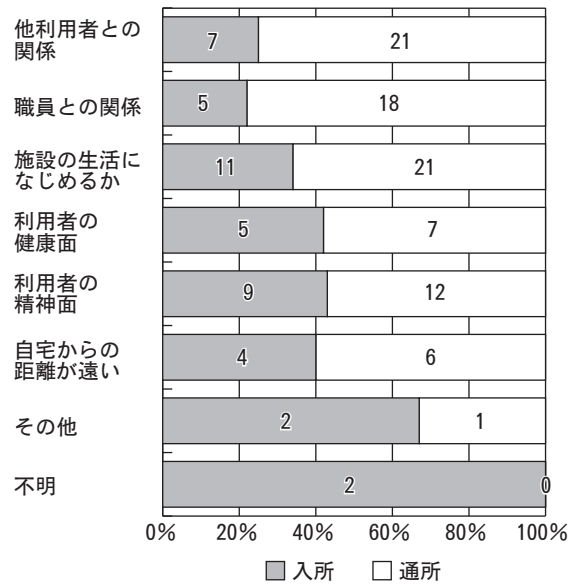
年代別にみると、入所では80歳代が「家族の介護」「健康不安」、70歳代が「経済面」「健康不安」「制度の変化」をあげ、通所では50歳代が「仕事」「近所付き合い」「経済面」、60歳代が「制度の変化」「健康不安」、70歳代が「家族の介護」「経済面」「健康不安」を不安の理由にあげている。今後、要介護との関係も知る必要を感じている。

施設入所に対する不安（入所当時）



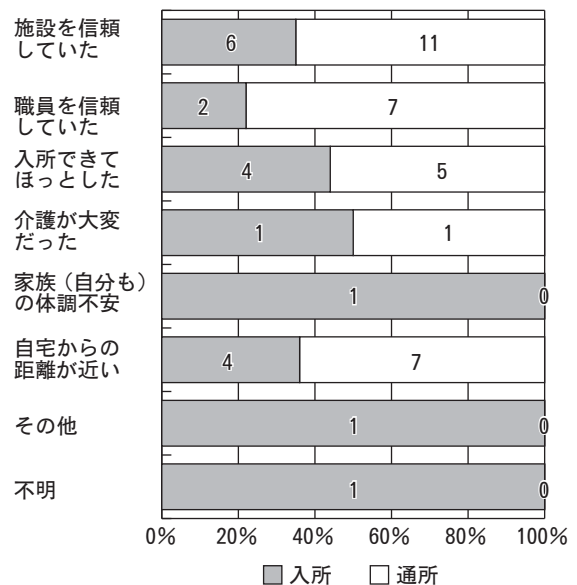
① 「不安有」の理由

「不安有」の理由



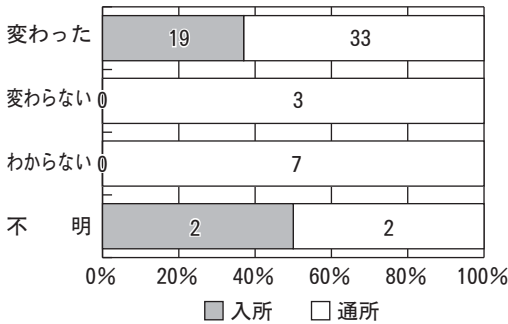
② 「不安無」の理由

「不安無」の理由



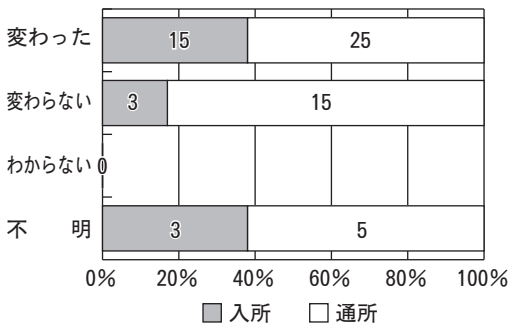
(9) 施設を利用して変わったか

施設を利用して変わったか（利用者）



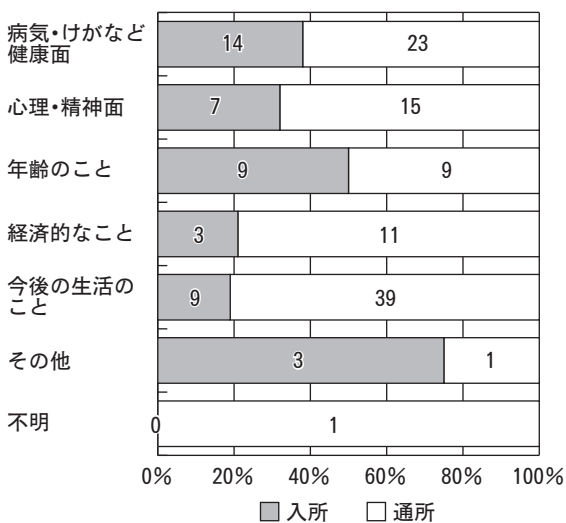
(10) 現在の心配や不安

施設を利用して変わったか（保護者）



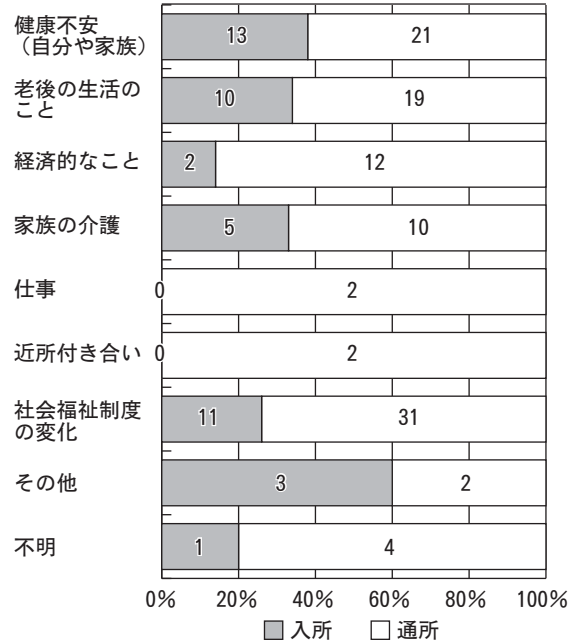
① 利用者の心配・不安の理由（現在）

利用者の心配・不安の理由（現在）



② 保護者の不安の理由（現在）

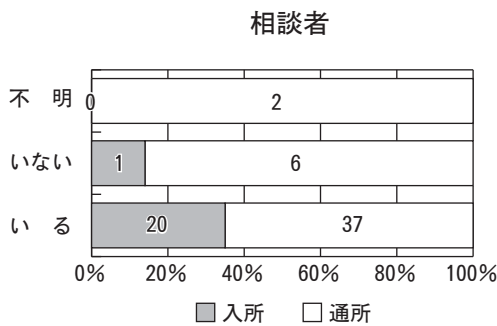
保護者の不安の理由（現在）



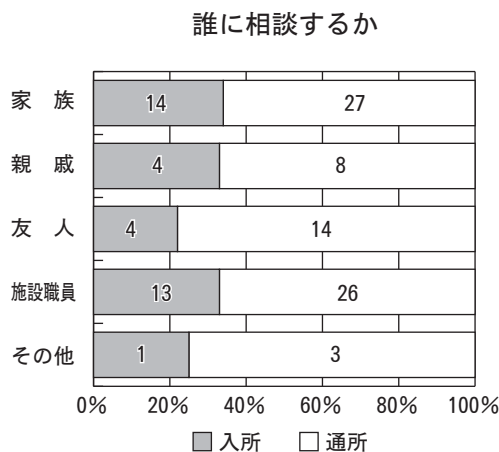
(11) 相談者

保護者は多くの不安を抱えていることが分かった。その不安を誰かに相談できているのか聞いてみた。入所20人（95.2%）、通所37人（82.2%）が「相談者がいる」と答えている。相談相手は入所と通所で少し違いがある。入所では「家族」「職員」がほとんどであるが、通所では、「家族」「職員」以外に「友人」の存在が大きいようである。保護者の年代が入所に比べて若いことも関係があると思われる。子どもの年齢が若いということは、養護学校の延長での付き合いが続いていることも関係していると考えられる。

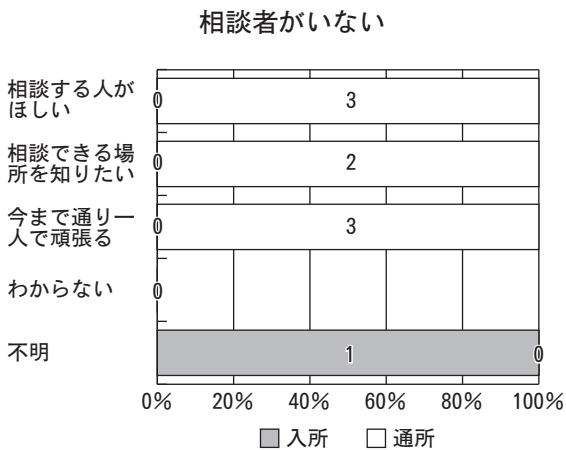
入所、通所ともに、「家族」の次に「職員」が多かったのは嬉しかった。支援費制度が施行された頃から、保健室に相談に来る保護者から、「相談する場所がない」「忙しそうで相談できる雰囲気ではない」などの声が多かったからである。通所では「相談者がいない」という結果も若干ある。「相談者がほしい」のに相談できない現実があることも事実である。「職員」を相談相手として期待しているという結果を、しっかり受け止めることが大切である。



① 「相談する人は誰」



② 「相談者がいない」



7. まとめ

利用者の高齢化および障害の重度化は今後ますます進行する。保護者の高齢化に伴い、保護者自身も「自分の老い」「家族の介護」と向き合っている。その上、障害者福祉制度の基盤が変化する昨今「子どもの将来を誰に託せばよいのか」、保護者の年代に

より、その心配や不安は変わる。福祉職員はそのことを十分理解して対応することが必要となる。特に若い職員は、自分の両親や祖父母の年代を相手にする訳であり、特に、高齢の女親には愚痴や不満をくり返し聞かされ、「うるさい存在」になろうかと思われる。施設の上司は、若い職員のストレスにも対応しながら、親の立場・気持ちを上手に代弁することも必要である。

結果にもあるように、まだ保護者は職員に期待している。信頼関係を再構築すること、そのためには保護者の話を謙虚に聴くことではないだろうか。保護者と職員が協力して利用者さんの生活を守ること、障害者支援の基本に立ち、そのための知識・技術・感性を磨くことである。特に相手の立場に立って傾聴できるコミュニケーション技術は必要と考える。全職員を対象とした研修を計画的に実施することが大切である。医療の必要な障害者が施設に増えている現状を考えると、障害者施設・高齢者施設のありようを根本から考えることが急がれる。

8. おわりに

アンケートにご協力いただきました社会福祉法人の「HT施設」「HW施設」「HJ施設」の皆様、ならびに、アンケートの配布・収集にご協力いただきました各施設の職員の皆様に深く感謝致します。

この調査をした時期は、「支援費制度」が始まる直前である。その後、短期間に「障害者自立支援法」「障害者総合支援法」と障害者福祉制度は変革している。その上、年金制度や介護保険制度の改正など、障害者や保護者を取り巻く環境は複雑さを増して、益々わかりにくくなり、不安を増長させていることだろう。

参考文献

- 1) 国民衛生の動向・厚生指標 増刊 Vol.59 2012/2013；厚生労働統計協会
- 2) 国民の福祉と介護の動向・厚生指標 増刊 Vol.59 2012/2013；厚生労働統計協会
- 3) 高齢社会白書（平成24年版）；内閣府